連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 77 回

源氏物語の植物たち（3）

もとよし　ふさお
本吉 總男　2024 年 11 月

アオイという植物については、第75回「源氏物語の植物（1）」で述べたので、「葵」の巻に関して改めて紹介すべき植物はありません。しかし、源氏物語の中でも最も重要な巻のひとつなのであらすじを書いておきましょう。この巻では懐妊していた源氏の正妻である葵上が源氏の愛人、六条御息所の生霊に取りつかれて悩まされ、苦しみながらも若君（夕霧）を出産し、死んでしまう様子が書かれています。

「葵」の巻では時代が進み、春宮（皇太子）であった人が帝になり、朱雀帝と呼ばれ、前の帝は院（上皇のこと）となります。源氏は22～23歳。大将（近衛府の長官）に昇進しています。

ここで、「葵」の中での重要な人物、六条御息所について述べておく必要があります。六条御息所はある大臣の娘で、前坊（前に皇太子であった人）と結婚し、娘（斎宮になる）を儲けますが、前坊が亡くなったのち、源氏と関係を結びます。このことは院にも知られていて、表沙汰にならぬよう訓戒を受けます。これには源氏も従わざるを得ず、慎んでいます。

一方、六条御息所は源氏の態度につれない思いを抱いています。そこにひとつの事件が起こります。御禊（別の儀式も表すが、この場合の御禊は、新しく就任した斎院が祭りの前に加茂川で禊を行う儀式）の日に、見物の車が一条の大路に沢山集まり、御禊の見物場所をとるために先争いをしています。この中で、六条御息所の車は葵上の車に押しやられて、人溜りの奥の何も見えぬ場所に閉じ込められます。そして自分には目もくれぬ源氏に恨みを抱きます。本当は、源氏は六条御息所に特別な愛情をもっていながら、立場上、表沙汰にならないようにしているのです。

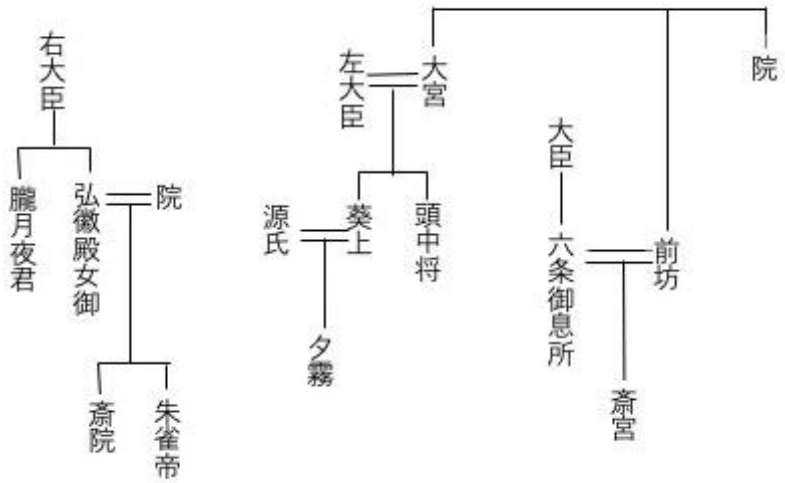
葵上は車騒動の時にはすでに妊娠しており、その後、物怪に悩ませられます。僧侶たちの加持祈祷による折伏にもめげず、物怪たちのひとつが執念深く葵上に取りつきます。葵上にはたまにしか通わなかったのに、今になって深い愛情を持って接する源氏や葵上の父（左大臣）の前で、物怪が葵上に取りつき、その正体を現します。

> 嘆きわび　空にみだるる　わが魂を　結びとどめよ　したがひのつま

難しい歌ですが、「嘆き苦しんだ挙句、体から抜け出し、迷っているのです。源氏を私に戻してください」という意味ではないかと思います。

この歌を読むのは六条御息所の声だったのです。さらに、源氏が「あなたは一体誰なのですか」と聞くと、葵上の姿が六条御息所の姿に変わります。葵上に執念深く取りついていたのは六条御息所の生霊だったのです。

葵上はやがて男の子を生み、この若宮はのちに夕霧と呼称されます。親（左大臣）も源氏も限りなく嬉しく思います。比叡山延暦寺の座主や高僧どもは、それぞれに願をかけたのち、これで大丈夫と帰ってしまいます。人々は若宮の世話にかまけて、葵上には気がまわりません。源氏は葵上の様子が心配で、何くれと看病に勤しんでいましたが、院（上皇）に会って状況を報告するため外出します。親（左大臣）も秋の司召（官職任命の儀式）に出席するため外出し、その間に葵上は急死してしまいます。「葵」の巻には明示的には書かれていませんが、高僧たちは不在で、看病に最も熱心な源氏も親（左大臣）もおらず、人々の葵上の病状に関心が薄れるすきに、葵上は六条御息所の生霊に取り殺されたと推察します。



系統図説明：葵上、六条御息所および親族との関係

注：斎宮とは伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女で、伊勢神宮に奉仕する前の1年間は潔斎（身を清めること）のため嵯峨野の野宮にこもる。斎院とは賀茂神社に奉仕する未婚の皇女で、やはり1年間は潔斎のため京都紫野の野宮にこもる。

サカキ

「葵」に続く「賢木」では、六条御息所と前坊（前皇太子・故人）との間にできた娘が斎宮となって、嵯峨野の野宮にいますが、伊勢神宮に奉仕する日も間近に迫っています。母、六条御息所は、六条の邸宅を離れて、野宮に斎宮とともに滞在しており、ともに伊勢に下向しようとしています。源氏は六条御息所に未練があるので、嵯峨野の野宮に行きますが、神仙な場所なので入ることはできません。簀子（濡れ縁）からそっと賢木（榊とも書く）の枝を折って差し入れます。

六条御息所

神垣は　しるしの杉も　なき物を　いかにまがへて　折れる榊ぞ

（この神垣には神垣の印となる杉もありませんのに、どう間違えて榊を折ったりしたのでしょうか）

源氏

乙女子が　あたりと思へば　榊葉の　香をなつかしみ　とめてこそ折れ

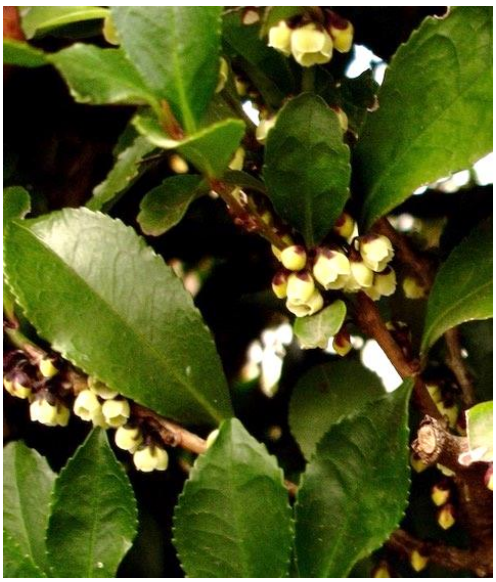
（乙女子のそばにいらっしゃると思ったので、榊葉の香りがなつかしく、折ってきたのです。）

微妙なやりとりで解釈も難しいです。

週刊朝日百科「世界の植物」66号では、上記の源氏の歌を引用し、榊に香りがあるかどうかを論じています。畔田伴存（1792～1859）の著書『古名録』によれば、香といったのは、香気をさすわけでなく艶色のうるわしいことをたたえたとし、榊は今のサカキでよいと結論しているそうです。また、広辞苑によれば、「①榊は常緑樹の総称で、特に神事に用いる木をいう　②ツバキ科の常緑小高木。（中略）古来神木として枝葉は神に供し（以下略）　③ヒサカキの通称」とあります。上記の歌にある榊は、断定することはできませんが、やはり現在にいうサカキと考えるのが至当と思われます。

サカキは温暖な地方や亜熱帯では普通に見られる植物で、茨城県にも存在するようですが、みずき野周辺では見たことがありません。参考のため向島百花園で見たサカキの写真を載せておきます。ヒサカキは本州、四国、九州、沖縄の日本列島と東アジアに分布し、サカキのない地方では、サカキと称して、ヒサカキの枝を神事に用います。ヒサカキはみずき野周辺でもよく見かけます。サカキは葉の縁にギザギザがなく、一方、ヒサカキは葉の縁にギザギザがあるので区別できます。

（参考写真）サカキ　3月中旬　向島百科園



ヒサカキ（花期）
3月下旬　みずき野7丁目

ヒサカキ（結実期）
11月下旬　守谷市本町地区

その後、「賢木（さかき）」の巻では源氏（23～25歳）には不運な出来事が続出します。斎宮が伊勢へ向かう日が近づき、六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）は斎宮に同伴して伊勢に行くことを固く心に決めています。これには源氏とのしがらみを断つ意味も含まれています。源氏は京にとどまるようにと六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）を涙ながらに説得しますが、六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）の心は変わりません。斎宮は桂川でお祓（はらえ）し、母、御息所（みやすどころ）とともに多くの人に見送られて伊勢に向かいます。

院（上皇）は重い病を患い、源氏に春宮（皇太子）の後ろ見を託し、やがて心安らかに崩御（死ぬこと）なさいます。年が変わって、朧月夜君は、内侍（内侍司の長官。帝の近くにあって帝への取り次ぎなどを行う。帝の妃になることもある）になります。

さらに大きな出来事は、藤壺中宮の出家です。春宮（院（上皇）が帝であった頃、藤壺中宮が産んだとされているが、実際は源氏と藤壺との密通によって産まれた）は大人びて、実父（源氏）に生写しです。春宮を見るにつけ、藤壺中宮は悩みます。一方、源氏の藤壺中宮への思いは深く、たびたび中宮を煩わせます。かつて権力をふるった左大臣（葵上の父、源氏の義父）は自邸にこもっており、今や右大臣が絶大な権力を持っています。朱雀帝の母、弘徽殿女御は今では太后となり、梅壺に移りに、弘徽殿には朧月夜内侍が住んでいます。藤壺中宮は「わが身はさておいて、春宮の御ために、弘徽殿太后の悪意にて、かならず良くないことが出てくるだろう」と考えると、恐ろしく思います。このような状況を避けるには選択肢はなく、出家してしまいます。

この巻の最後の出来事は、源氏の朧月夜内侍との密会を右大臣に見つかってしまうことです。激しい雷鳴の夜が明けて、右大臣は朧月夜内侍を見舞いに訪れ、源氏が添い寝しているところを目撃します。散らばっている紙に書かれている文字は源氏の筆跡です。右大臣はそれらの紙を証拠品として、弘徽殿太后に見せます。太后は、憤怒とともに、この事件を、源氏を左遷する都合良い機会ととらえます。

ウメ

上述のように、弘徽殿太后は梅壺を局にします。梅壺の正式名は凝花舎といい、中庭には紅梅や白梅が植えてあります。

ウメの原産地は中国で、日本には古代に持ち込まれたようです。ウメの歴史については、（一財）梅研究会「梅を楽しむ」が参考になります。

ウメは小高木で、花はサクラの花に似ています。しかし、サクラの花には花柄（花と枝をつなぐ柄）がありますが、ウメの花はほとんど無柄です。今もウメには紅梅と白梅が多く、藤壺の梅とあまり違いはないと思います。ウメはいち早く春の到来を告げる花です。みずき野や周辺で見られるウメの写真を載せておきます。

早咲きのコウバイ
1月上旬　みずき野さくらの杜公園

早咲きのハクバイ
1月中旬　本町地区

ピンクのウメ
2月中旬　みずき野さくらの杜公園

「賢木(さかき)」に続く「花散里(はなちるさと)」は「源氏物語」54帖のうちで最も短い巻です。時代は「賢木(さかき)」と重なります。源氏は煩わしいことが多く、それでもせねばならないこともたくさんあります。源氏は内裏(だいり)で出逢った女性（花散里(はなちるさと)）を思い出し、会ってみようと出かけます。花散里(はなちるさと)は、姉の麗景殿女御(れいけいでんのにょうご)（前帝の妻の一人。今は源氏の庇護を受けて暮らしている）の邸宅の西おもてに住んでいます。麗景殿女御(れいけいでんのにょうご)の邸宅を訪ねる途中の中川のあたりを過ぎたところにささやかな家があり、琴の音(ね)に惹かれて、門内を見ると桂(かつら)の大木からの風が匂います。源氏は女に歌を送りますが、女は返し歌によって会うことを断ります、源氏は麗景殿女御(れいけいでんのにょうご)を訪ね、昔話などをしているうちに夜もふけ、橘(たちばな)の香りが漂ってきます。その後西おもてで花散里(はなちるさと)と情をかわします。「花散里(はなちるさと)」という呼び名は、次の歌に由来します。

源氏

たちばなの　香(か)をなつかしみ　郭公(ほととぎす)　花散る里を　たづねてぞ訪(と)ふ

（たちばなの香りが懐かしくて、私（ほととぎすに例える）は
たちばなの花の散る里を訪ねてきたのです）

「花散里(はなちるさと)」は前巻「賢木(さかき)」と次の巻「須磨(すま)」という、源氏にとって激動の時代の間に置かれたほのぼのとした話題で、源氏物語の中でも、構成の巧みさを思わせる巻です。

この巻には植物として、カツラとタチバナが出てきます。

カツラ

カツラは落葉高木で雌雄異株。高さ30メートル、幹の直径は2メートルに達します。葉は円形に近いハート型です。カツラは水を好み、渓流に沿ってよく生えるようです。みずき野では水分が足りないのかも知れません。分布は北海道、本州、諸国、九州まで、日本の固有種です。「花散里(はなちるさと)」に登場するカツラは新芽の頃ですが、その頃に相当する写真は持ち合わせないので、黄葉に近い写真を載せておきます。

カツラ　11月下旬　みずき野中央公園

タチバナ

タチバナはミカン科の常緑小高木。本州南部、四国、九州、沖縄、台湾が原産地で、各地で栽培されていたようです。花は初夏に咲き、よく香ります。この香りを昔の人々は好んだのでしょう。いや、大正時代にも、文部省唱歌「鯉のぼり」に　橘(たちばな)　が挿入されています。

♪　甍(いらか)　の波と雲の波、重なる波の中空を、　橘(たちばな)　かおる朝風に、高く泳ぐや鯉のぼり♪

まだその頃まで、タチバナの香りは好まれていたのでしょう。それが今では、タチバナは環境省により準絶滅危惧種に指定され、15県が絶滅危惧Ⅰ類または II 類に指定しています。その伝統的な香りも人々から忘れ去られているのではないかと思います。かくいう私も、神代植物公園で見るまでは、タチバナを知りませんでした。花の盛りでしたが、今はその香りを思い出せません。

（参考写真）タチバナ　5月上旬　神代植物公園

タチバナの花　同上

タチバナの実（花の咲く時期にも見られる）　同上

なお、ひな祭りの雛人形を飾るとき、作り物の「左近の桜」と「右近の橘（たちばな）」も飾ります。したがって、タチバナを実際に見ていなくても、名は知られているでしょう。本物の「左近の桜」と「右近の橘（たちばな）」は京都御所の紫宸殿（ししんでん）の左右に植えられ、平安時代を過ぎてのち、何度も植え継がれ、今も季節には花を咲かせているようです。「左近の桜」と「右近の橘（たちばな）」は玉座から見て、左にあるか、右にあるかによっています。『左近』・『右近』とは、「左近衛府（えふ）」・「右近衛府（えふ）」の略称で、「衛府（えふ）」は内裏（だいり）の警護にあたった役所のことで紫宸殿（ししんでん）の左右に置かれていました。そこにサクラとタチバナが植えてあったのです。